

水資源・環境学会 2024 年研究大会 報告要旨（自由論題第 1 部）

自由論題1

水害訴訟史における鬼怒川水害の意義－第一審水戸地裁判決を題材に

梶原健嗣(愛国学園大学)

2015 年 9 月の鬼怒川水害に対し、2018 年 8 月、被害者 30 名（法人 1 を含む）が水害訴訟を提訴した。そして 2022 年 7 月、水戸地方裁判所は若宮戸地区の溢水につき、国の管理瑕疵を認めた。一部勝訴とはいえ、水害訴訟では久しぶりの原告勝訴判決である。判決に当たり裁判所は、平作川水害訴訟最高裁判決に依拠した。一般に水害訴訟の参照判例は、未改修河川の大東最判、改修済み河川の多摩川最判と整理されるなかで、水戸地裁判決は上記 2 例に加え、内在的瑕疵の判断基準である平作川最判という 3 類型説を打ち立てた。判決は、改修計画を策定した時点で想定された安全性が損なわれないよう、河川管理者は適切な管理をすべきであり、未改修河川といえども、「現状の安全性を確保すべき」であることを強調した。その判示には、河川管理に規範的な意味を改めて明確化した意義がある。

自由論題2

愛知川流域圏における地下水評価の変遷と水資源管理

秋山道雄(滋賀県立大学名誉教授)・保屋野初子(星槎大学)・東 智美(埼玉大学)

愛知川流域圏で展開されてきた国営湖東平野事業（2014～2024 年度）が今年度をもって終結する。この事業は、1993 年に着工された国営新愛知川事業が 1994 年に地元住民の事業差し止め提訴以来司法部門における検証過程に入り、紆余曲折を経て、2007 年に最高裁による事業計画取り消し判決が確定したのを受け、新たに計画を策定し直して開始されたものである。国営新愛知川事業は、愛知川上流に建設されていた永源寺ダム（1972 年完成）の上流に総貯水量 2,500 万 m³ の第 2 ダムを建設するというものであったが、事業計画の差し止めにより、国営湖東平野事業では開発水量を約 1,000 万 m³ とし、そのうち 6 割は地下水を揚水し、他は既存水路の改修や永源寺ダムの浚渫、調整池の新設等に対応しようというものである。この事業は、「ダムに依らない水源開発は可能か？」という問いへのひとつの回答となっているが、それにとどまらず地下水という資源の評価が時代的文脈によって変化し、それが新たな水資源管理問題を提起するという事例ともなっている。

自由論題3

デ=レーケの知られざる宇治川改修計画

中川晃成(龍谷大学)

淀川河川事務所が運営する淀川資料館(枚方市)には、明治初期からの淀川改修にかかわる行政文書類が多数保管される。そのうちに、宇治川とそれに接続する巨椋池などを含む水域を描いた明治前期制作の河川測量図がある。現在は失われたこの接続水域は、淀川水系の宇治川・木津川・桂川の三大支川が合する三川合流部にあって、これら河水が膨張した際に遊水機能を果たすものであった。20世紀初頭の淀川改良工事により巨椋池は宇治川から事実上分離され、20世紀中頃の巨椋池全面干拓などを経て、その遊水機能は完全喪失するに至る。この現況は、淀川改良工事を主導した沖野忠雄らの治水構想に基づくものと言える。それ以前、淀川水系に近代治水の方法論が導入された明治初頭において、これとはまったく異なる原理による水系改修の着想があった。それが、デ=レーケにより、その来日からわずか3年を満たない1876(明治9)年7月に著された『宇治川修繕目論見』である。冒頭の測量図は、その記載のあり方からこの目論見の付属図であると評価できる。この図が確認されたことにより、既知であった当該目論見書だけからは判然としなかった宇治川改修の具体的内容が明瞭となる。あわせて、デ=レーケがそこで構想していた三川合流部における治水原理とその現代的意義についても触れる。

自由論題4

地域環境 NPO における会員層と活動層の変化—NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の会員アンケート調査結果の4時点比較をもとに—

山添史郎(京都府立大学大学院・滋賀県日野町役場)・野田浩資(京都府立大学)

地域の身近な水環境を保全する NPO (以下、地域環境 NPO) においては、設立以後、年数を重ね、停滞状況に陥るものも少なくない。地域環境 NPO は、「ヒト次第」の組織であることから、その活動の持続のためには、いかにして会員を獲得し、活動する人たちを確保していくかが課題である。滋賀県守山市の NPO 法人「びわこ豊穰の郷」は、地域の身近な水路・河川を主な活動の対象とし、琵琶湖赤野井湾においては、外来種のオオバナミズキンバイの駆除に取り組むとともに、「赤野井湾再生プロジェクト」の一翼を担うなど、滋賀県・琵琶湖を代表する地域環境 NPO として位置付けられる。「びわこ豊穰の郷」は、コアメンバーの交代等を経験しながらも、四半世紀にわたり活動を継続し、守山市における水環境保全の中核を担ってきている。本報告では、「びわこ豊穰の郷」の会員アンケート調査結果の4時点比較をもとに、地域環境 NPO の会員層がどのように変化し、また、活動層がどのように変化してきたかを明らかにする。